



TITLE:

中世建築生産史の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

永井, 規男

CITATION:

永井, 規男. 中世建築生産史の研究. 京都大学, 1968, 工学博士

ISSUE DATE:

1968-01-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212744>

RIGHT:

【277】

氏 名	永 井 規 男 なが い のり お
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	論 工 博 第 190 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 43 年 1 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	中世建築生産史の研究

論文調査委員 (主 査) 教授 福山敏男 教授 川上 貢 教授 増田友也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本中世の建築生産を多角的に把握しようとする目的にもとづいた研究をまとめたもので、3編6章からなっている。

第1編は、中世の建築生産社会の基本的な構成を、中世に特有なものといえる勸進造営という生産体制に関する考察から解明しようとしたものである。

第1章では、勸進造営の生産体制が、鎌倉時代初期に東大寺・東寺の造営において、重源・文覚が大勸進となり、造国知行制が用いられた結果として成立したことを述べている。そして、重源・文覚を長とする勸進団の構成や性格、またこれらの造営に参加した工匠・仏師等の性格を論じて、前代までのものとは異質の新しい建築生産の社会的体制がここに形成されたことを明らかにしている。

第2章では、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけては、教団的組織を背景にもつ律僧たちを勸進者とする建築活動が大に行なわれたことを、建築史上の注目すべき現象としてまず指摘している。この活動は、宋様式を背景にもつ北京律派と、和様を伝統的に継承する南京律派の二つを軸として展開されたのであるが、この異なった様式を背負う両派が合流して造営を行なう事例があったことから、そこに新しい様式すなわち中世新和様の形成される要因があると考えた。それはこの建築活動が最高潮となる13世紀後半期が、遺構の上で新和様が出現してくる時期でもあることによって大きな可能性をもって云えるところである。そして今後の中世新和様の研究においては、その生産体制の中心に位置する律僧勸進者の問題が、工匠の問題とともに重要な意義をもつと指摘する。

第3章では、中世最末期の戦国時代の勸進造営の社会を、戦国時代にだけあらわれる「十穀」という勸進聖の名称を指標として解明しようとしている。まず十穀を、時衆の系譜につながるものがその宗教的退化とひきかえに、遊芸的な面に職業化する傾向の中で、とくに勸進造営を職業的に行なうようになったものとしている。そして十穀の建築活動の事例を多数集めて考察し、その建築生産史上の役割は、荘園経済の上にたつ権門寺社の建築生産体制を、新しい経済体制をもち込むことによって打破して隷属工匠を解放

したこと、地方における活動によって地方の建築文化の向上に資したこと等であると述べている。

第2編は、建築費の数計的分析によって、中世建築生産の特質を論考したものである。

第1章では、藤原時代の浄土教建築の典型的な姿をもつと考えられる法勝寺常行堂（1085年）の造営費を分析研究している。この造営では、造営費のすくなくとも65%は材料費で占められ、さらにその中では金・銀・銅を主とする装飾関係の材料費が建築本体費よりも上回っていること、また常行堂とそれに付属する廊の比較において、常行堂の建築本体にも多大な手間が投入されていることを解明している。すなわちこれによって、浄土教建築の特質が装飾的・工芸的であることを数字の上から理解することが可能になっている。

第2章においては、中世の地方有力神社における建築生産の一つの類型を示すものと考えられる大和国多武峰本殿の造営（1520年）に関する費用を分析研究している。その建築費構成比は、材料費30%、労務費55%、経費15%であるが、近世における美濃南宮神社本社造の造営では、造営費の中で材料費が65%以上を占めているのと比較すると、生産のあり方に歴然とした差が認められ、労務費の大であることを中世的建築生産の第一の特質として挙げている。さらに労務費を分析して、造営に従事した労務者の中、その約3分の1に当たる単純労働者の労働が奉仕的色彩の強いものであることを明らかにし、そこに古代的なものの影が濃く残っていることを述べている。さらに以上に加えて、天正年度の筑前宗像社辻津宮本殿の造営費を分析し、そこにおいても同種の中世的傾向が認められるとしている。

第3編は、建築の生産を動的な過程としてとらえ、そこに認められる現象の中に中世的なものを見出して論じたものである。1章だけであるが、中世公家住宅と僧侶住坊の事例を、それぞれ三条西実隆邸と相国寺内松泉軒の造営に関して詳細にその造営過程を述べ、室町時代後期における住宅建築の生産において、一般的なものと考えられる特徴ある形態を抽出している。すなわちそれは(1)工事は主体工事と造作工事の前後二つの段階に明確に分離され、前者は請負的に行なわれ、後者では個々の場合において建築主の指示に従いながら進められている。(2)工匠への給与方式は、主体工事では手間請が、造作工事では日給制がとられているという2点である。さらにそうした生産形態が行なわれた原因をたずねて、この時代の住宅設計の方式を推察し、間取りや立面など建築の全体的なものは社会的規制に支配されて身分階層に応じた類型範囲の中にとどまり、設計の個性的なものは細部造作においてはじめて表現することが可能であったと述べている。ついでこれに関連して、当時の住宅生産における工匠の製作組織について考察し、そこでは番匠組織は血縁的に構成され、建築主と番匠との間には特定の長期にわたる関係を認め、それをいわゆる出入関係としている。

論文審査の結果の要旨

建築形成の史的諸条件をその対象とする建築生産史の研究は、複雑な様相を示しているわが国の中世建築史を解明する上で重要な意義をもつものである。建築生産史の研究は、これまで主として生産組織に関する線に沿って進められてきたが、それが建築生産史研究のすべてでないことは明らかであり、とくに中世については、基本的な問題が多く残されたままである。著者は、中世建築における生産の社会的構造、経済的構造、および生産形態に関する問題をとりあげ、生産史に新しい観点を加えて若干の問題を提起し

でいる。

まず著者は、中世の建築生産の社会的構造をとりあげ、基本的には勸進造営体制の上に立つという見解をとり、中世を初期・中期・後期の三期に分け、各時期における勸進造営の諸例を比較考察している。はじめに勸進造営は、体制的に中世初期に成立するとし、俊乗坊重源や文覚の建築業績がその契機になったことを指摘し、両人の業績に新しい評価を加えている。ついで奈良・京都・鎌倉の旧仏教寺院に拠った律宗宗教団とその建築活動という著者が新しく注意した歴史的事実をもとにして、中世中期における建築生産の社会的構造を解明しようとしている。そして中世建築を特徴づける形式と技法の新傾向の一つにあげられる新和様の成立を、この律宗教団の建築運動と結びつけて考えようと試みている。これは新和様の研究の上で注目すべき提案である。後期においては、「十穀」と呼ばれる造営勸進者が建築社会の中で大きな勢力をもって活動することを指摘し、彼らが、形成する建築生産社会の構造的特質とその変遷を説明している。

ついで建築生産の経済的構造を解明するために、藤原時代の常行堂、室町時代の社殿の場合についてその造営費を分析し、それらの建築生産における特質が、造営費の内部構成の中に顕著に表われていることを数量的に示し、また古代・近世の場合と比較することによって、中世の建築生産は基本的には古代的なものの延長上にあり、労務費（専門技能工の）を中心に建築経済が展開していることを指摘している。

生産形態に関する問題としては、住宅史上重要な時代である中世後期の住宅生産の場合をとりあげ、生産の過程を文献資料の上で追うという方法をとることによって、その生産形態に注目すべき特徴があることを発見している。それは工事が前後の二段階に区別され、工事の進め方と工匠給与の支給方法の二面において、各段階毎に全く異なった方式が採用されているという事実である。著者はこの点をさらに追及して、以上のような現象は当時の住宅設計の方式と深い関連があることを明らかにし、住宅史研究へのアプローチがこうした生産史研究からもなされうことを示した。

以上を要するに、この論文は独自の視点からわが国の中世建築生産の歴史をみつめ、建築生産史の立体的な組み立てに寄与する諸事実を見出し、新説を立てているだけでなく、生産史研究を建築史研究の他の分野とできるだけ有機的に結びつけようと努力したものであって、学術上貢献するところが多い。

よって本論文は工学博士の学位論文としての価値を有するものと認める。